

キジムナーフェスタ¹

1. はじめに

キジムナーフェスタは「国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ」（International Festival OKINAWA for Young Audience）を正式名称とする児童劇フェスティバルであり、1994年から2年間、沖縄県中部広域圏で開催された同名称の演劇祭を引き継ぐ形で、戦後60年目を迎えた2005年に本格的にスタートを切った。開催地は沖縄第二の都市である沖縄市である²。



図1 キジムナーフェスタのロゴ

2. 沖縄市の概要

沖縄本島の中部に位置する沖縄市は2007年12月現在、人口133,014人（男性64,230人、女性68,784人）、面積48.99km²を有する沖縄県第二の都市である。那覇市の北東約20kmに位置し、隣接する市町村として、うるま市（人口約11.6万人）や宜野湾市（人口約9万人）があり、いずれの市とも通勤圏にある³。沖縄市は、1974年にコザ市と美里村が合併して誕生した市である。

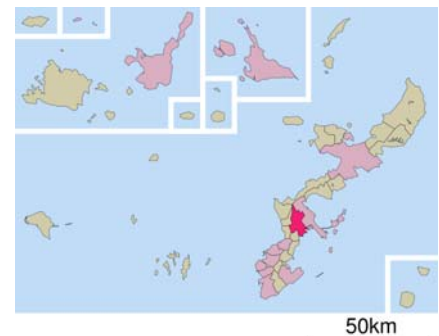


図2 沖縄市の位置

市内には沖縄自動車道路のインターチェンジが2カ所あり、北部の中核都市である名護市も1時間以内の位置にあるなど、中北部へのアクセスには良好な位置にある。那覇空港までも約1時間

¹ GRIPS 文化政策プログラムチーム（ディレクター：教授 垣内恵美子、チームメンバー：研究助手 奥山忠裕、阿部大輔）2007年9月作成。

² この点について、フェスタの下山久プロデューサーは、「今回は開催範囲が広すぎた。世界の演劇イベントの開催地はほとんどが小さな町。期間中、町は演劇と交流一色に染まる。今回は沖縄市に地域を限定したことで濃密感が出た」（沖縄タイムス2005年8月7日）と述べている。

³ これら3市の人口総和（33.6万人）は那覇市（31.4万人）を超えているという（参考＝沖縄市HP<http://www.city.okinawa.okinawa.jp/site/view/cateview.jsp?cateid=70>）。

である。ただし市内に鉄道は存在せず、公共交通としてはバスがあるのみである。産業構造としては、第三次産業が約 80%を占める。

2005 年 11 月現在、18～59 歳の人口は 77,142 人を数える。18～34 歳の若年者の人口は 33,793 人であり、これは人口の約 25%を占めている。2005 年の国勢調査によると市内の完全失業率は約 13.7%（7683 人）であり、失業率の問題を抱える沖縄県においても高い数値となっている。特に若年者の失業率は約 16.4%（全国平均は約 9.4%）と深刻であった。失業率の高さは地場産業の不在とも関連しており、沖縄市はコールセンターを中心とした IT 企業の誘致を進め、雇用対策に取り組んでいる（沖縄市 HP による）。1999 年から 26 社の IT 関連企業が進出し、ビジネスを展開している。沖縄市は電源地域に指定されており、この電源地域に企業が立地する場合には、国の「電源過疎化地域等企業立地促進事業費補助金」制度の利用が可能となる。

3. キジムナーフェスタの概要

本稿では、2005～2007 年の合計 3 年の具体的な活動内容を整理する。

3-1 キジムナーフェスタの目的

キジムナーフェスタは、「次代を担う子どもたちが、世界の優れた舞台芸術の鑑賞やワークショップなどを通じた仲間との共通体験により、互いに理解し尊重しあう心を育み、友情を深め、豊かな感性・創造力・人間性を育てていく場を提供すること」を目的としている⁴。

また、子どもを中心にした市民と多くの国々の人々との交流を通じて、沖縄の伝統的精神である「イチヤリバチョーデー（一度会ったら人は皆兄弟）」、「万国津梁（海外交流によって万国の架け橋となる）」の心を世界の人々と共有し、子どもたちとともに平和な世界への歩みをすすめることも目指している。

3-2 関係団体

2007 年のキジムナーフェスタの主催は、沖縄市、あしびなー自主事業実行委員会、エーシーオー沖縄、（特）沖縄県芸術文化振興協会、（財）沖縄こども未来ゾーン運営委員会、沖縄市「文化芸術による創造のまち」支援事業実行委員会、国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ実行委員会、であった。

主な助成金として、文化庁の「平成 19 年度芸術拠点形成事業」「平成 19 年度国際芸術交流支援事業」「平成 19 年度芸術創造活動重点支援事業」「平成 19 年度「文化芸術による創造のまち」支援事業」「平成 19 年度芸術団体人材育成支援事業」の助成を受けている⁵。

3-3 実施日程ならびに会場

2005 年は 7 月 23 日（土）～30 日（土）（8 日間）、2006 年は 7 月 29 日（土）～8 月 6 日（日）（9 日間）、2007 年は 7 月 21 日（土）～29 日（日）（9 日間）、といずれも 7 月末の週末から約 1 週間に

⁴ 2006 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ実行委員会：『2006 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ（キジムナーフェスタ） 実施報告書』、2006 年 12 月、4 頁

⁵ その他の助成団体は、（財）地域創造、独立行政法人国際交流基金、独立行政法人国立青少年教育振興機構（子どもゆめ基金）、独立行政法人日本万国博覧会記念機構、社団法人私的録音補償金管理協会、（財）三菱 UFJ 信託地域文化財団、（財）全国税理士共栄会文化財団、日本自転車振興会、全国モーターボート競走施行者協議会、日本たばこ産業株式会社、（社）日本児童演劇協会「落合總三郎児童青少年演劇基金」。

わたり開催されている。

会場について、3年連続で会場となっているのは「沖縄市民小劇場あしびなー」「沖縄市民会館」「沖縄市中央公民館」「中の町公民館」「沖縄市立芸能館」「沖縄市青少年センター」の6施設である(表1)。2006年からは、施設内に複数の会場を設けることのできる「沖縄こどもの国」が新たな実演会場として加わった。また、「沖縄市商工会議所」「沖縄市働く婦人の家」「沖縄市武道館 剣道場」も2年連続で会場となっている。2007年の会場に興味深いのは、「商店街店舗」であろう。これは、キジムナーフェスタを、より中心市街地(まちなか)の人の流れと統合する形で開催していこうとする動きと理解することができる。

表-1 キジムナーフェスタの会場

	2005年	2006年	2007年
1	沖縄市民小劇場あしびなー	沖縄市民小劇場あしびなー	沖縄市民小劇場あしびなー
2	沖縄市民会館(大ホール・小ホール)	沖縄市民会館(大ホール・小ホール)	沖縄市民会館(大ホール・小ホール)
3	沖縄市中央公民館	沖縄市中央公民館	沖縄市中央公民館
4	中の町公民館	沖縄市商工会議所	沖縄市商工会議所
5	沖縄市立芸能館	沖縄市働く婦人の家	沖縄市働く婦人の家
6	南桃原公民館	中の町公民館	中の町公民館
7	かなめ琉舞練場	沖縄市立芸能館	沖縄市立芸能館
8	沖縄市青少年センター	特設野外テント(コリンザ前)	沖縄こどもの国
9	キジムナーフェスタ・センター	沖縄市青少年センター	沖縄市青少年センター
10		沖縄こどもの国	沖縄市武道館 剣道場
11		プラザハウス	商店街店舗
12		沖縄市武道館 剣道場	
13		キジムナーフェスタ・センター	

赤字は3カ年を通して会場となっている施設。

ほとんどの会場は徒歩20分以内の範囲にあり、フェスタの間中は市民公共駐車場を起点に専用のシャトルバス(無料)が巡回するサービスがある。



図2 キジムナーフェスタの実施会場(2007年)

3-4 上演プログラムならびに上演数、参加者数⁶

2005年

2005年は12ヶ国13団体14作品55ステージ123名を擁した「海外招待作品公演」が合計13,674名の参加を得た。全企画の参加者総数は15,809名であり、「海外招待作品公演」への参加者は全体の約86%を占めている。参加した団体を国・地域別に見ると、イギリス、イスラエル、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、スイス、フランス、オーストラリア、ジンバブエ、中国、台湾、韓国（2団体）となっている。

「国内招待作品公演」は3団体64名6ステージで行われ、合計693名の入場者を得た。地域別に見ると、名古屋から1団体、地元沖縄から2団体となっている。「特別ゲスト公演」は1団体1ステージで合計152名の入場者、「賛同公演」は1劇団1ステージで63名の入場者、「国際シンポジウム」は2企画⁷で合計100名の入場者、国際ワークショップは2企画⁸で合計87名の入場者を得た。その他の文化交流企画として、全開催日において国際交流サロン「ガジュマルひろば」にて、「島唄ライブ」が行われた。

2006年

2006年は12ヶ国15団体21作品70ステージ129名を擁した「海外招待作品公演」が合計10,595名の参加を得た。全企画の参加者総数は19,612名であり、「海外招待作品公演」への参加者は全体の約54%を占めている。参加した団体を国・地域別に見ると、デンマーク（2団体）、スウェーデン、ベルギー、スイス、ブルガリア、ロシア、カナダ（2団体）、メキシコ、アルゼンチン、インドネシア、韓国、イスラエル（2団体）となっている。「国際共同制作作品公演」は2ヶ国3団体3作品18ステージ32名で合計3487名の入場者を得た。

「国内招待作品公演」は6団体6作品17ステージで行われ、合計2479名の入場者を得た。地域別に見ると、東京から2団体、神奈川から3団体、沖縄から1団体となっている。「特別作品公演」は2団体2作品2ステージで合計260名の入場者、「子どもの舞台作品公演」は2劇団2作品2ステージで468名の入場者、「自由参加作品公演」は1劇団1作品3ステージで合計231名の入場者、「国際シンポジウム」は2企画⁹で合計75名の入場者、「国際ワークショップ」は7企画¹⁰で行われた。その他の文化交流企画として、全開催日において国際交流サロン「ガジュマルひろば」にて、「ちゃんぷるーコンサート」が行われた。

前年と比べると、総参加者数が15,809名から19,612名へと増加し、内容も多様化している。公演内

⁶ 本項におけるデータの出典は、2005 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ実行委員会：『2005 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ 実施報告書』、2005年10月、ならびに2006 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ実行委員会：『2006 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ〈キジムナーフェスタ〉 実施報告書』、2006年12月、に依拠している。

⁷ アジア国際会議「戦後60年～アジアの友好と文化交流」（7月27日実施、参加者35名）ならびに国際シンポジウム「子どもたちのために、児童・青少年演劇は何かができるのか？」（7月28日実施、参加者65名）。

⁸ バレエ・ワークショップ（初級・中級・上級・アトリエ4クラス）（7月26日～30日実施、参加者64名）ならびに「俳優のためのドラマ・ワークショップ」（7月27日実施、参加者23名）。

⁹ 中東シンポジウム「中東地域でのとりくみから～平和と舞台芸術を考える」（8月3日実施、参加者40名）ならびに国際シンポジウム「子どもたちのために、児童・青少年演劇は何かができるのか？」（8月4日実施、参加者35名）。

¹⁰ 「バレエ・ワークショップ」（初級・中級・上級・アトリエ4クラス）、「ダンスワークショップ」、「子ども異文化ワークショップ～バリ島ワヤンを体験」、「ドラマ・イン・エデュケーション」、「俳優のためのドラマ・ワークショップ」、「子どもたちのための人形劇ワークショップ／親子のための人形劇ワークショップ／指導者のための人形劇ワークショップ」、「体験ワークショップ カンカラ三線をつくって演奏しよう」。

容の多様化に伴い、2005年には全参加者の86%を占めていた「海外招待作品公演」が、翌年2006年には54%となっている。それに代わり、「国内招待作品公演」が大きくその比率を伸ばしている（約5%から約13%へ）。

2007年

2007年は15ヶ国19作品の「海外招待作品公演」が行われた。参加した団体を国・地域別に見ると、デンマーク（3団体）、スイス、ドイツ（2団体）、クロアチア、キプロス（2団体）、ロシア、パレスチナ、ヨルダン、カナダ、インド、中国（3団体）、カンボジア、韓国となっている。「国際共同制作作品公演」は、日本ーカザフスタン共同制作と日本ーロシア共同制作が実演された。

「国内招待作品公演」は、これまでで最大となる合計10団体を招待して行われた。「子どもの舞台作品公演」は3企画、新たに導入された「子どもの本 読みがたり」は6企画、「セミナー」は4企画、「シンポジウム」¹¹は3企画、「ワークショップ」は10企画¹²が実施された。

3-5 期間中の主なサービス

キジムナーフェスタ開催中の主なサービスとしては以下が挙げられる。

- 駐車場とシャトルバス（3-2にて言及している）。会場館を連絡する交通手段。
- 託児（有料）
- 国際交流サロン「ガジュマルひろば」。観客や出演者、海外ゲストの交流・休憩スペース。案内所、チケットセンター、レストランも設置。
- ちゃんぷるーコンサート。海外ゲストや参加者が沖縄の文化・芸能を体感しながら交流するコンサートの開催。
- メールマガジン

¹¹ 国際シンポジウムⅠ「児童青少年演劇と教育～子どもたちに演劇との出会いを」（7月27日実施）、国際シンポジウムⅡ「紛争地域の子どもたち～児童演劇はどんな仕事をしているか」（7月28日実施）、「子どもと絵本」（7月21日実施）。

¹² 「バレエ・ワークショップ」（初級・中級・上級・アトリエ4クラス）、「ルードラ体験プログラム」、「演劇教育（DIE）ワークショップ～アメリカ編」、「演劇教育（DIE）ワークショップ～イギリス編」、「児童青少年演劇専門俳優ワークショップ」、「子どものための人形劇ワークショップ／指導者のための人形劇ワークショップ」、「ペープサートであそぶワークショップ」、「手づくりの部屋～絵本の主人公をつくろう！」、「アニマルいろいろえとせとらであそぼう」。